

## 大宰大貳・権帥について

### はじめに

筑紫の大宰府は、令制下西海道九国二島の内政及び外交を管轄した地方行政機構で、その長官が帥と呼ばれ、九世紀前半以降親王が任命されたが、名譽職で遥任のため権帥や大貳が実質的な長となった。ただ権帥と大貳とが併任されることはなかったから、府の事務はどちらか一方が取り扱っていたことになる。

本稿は平安時代中期から後期にかけての権帥や大貳の変遷諸相を検討することになるが、例えば帥では、『和泉式部日記』に於いて冷泉天皇の第三皇子である彈正宮為尊親王没後、その弟の敦道親王との恋愛交渉を描き、その弟宮が大宰帥であったため帥宮と呼ばれていることは文学史上でも周知のことである。また権帥については、時の権力闘争に巻き込まれ大宰権帥として配流左遷された右大臣菅原道真、左大臣源高明、そして内大臣藤原伊周などが著名なところであろう。

こうした例はいっけん大宰府が大臣の流刑地のような錯覚をきたすが、流罪の身は『職原鈔』（群書類従）に「為大臣之人左迁之時任権帥。而

久下 裕利

不可知府務也」とある如く府務に関わらないが、一般の職務は繁多で、とくに外寇は悩みの種となったようだ。しかし、一方利権も膨大であったらしく、大貳が辞書（辞表）を出すと、後任を希望する者が殺到するのが常であったように、隆家の後を襲った行成などは道長家の長家を婿にむかえたため、その世話のための費用捻出が目的であって、補任後は、「筑紫より物などもてまゐりなどして、いとはなやかにもてなしきこえたまふ」（栄花物語巻十六、もとのしづく）という状態であった。ただ必ずしも現地へ赴任するとは限らず、むしろ在京のままの不赴任者が続出したため、赴任賞などがあったことが田中篤子氏によって指摘されている。<sup>注(1)</sup>

もっとも隆家の場合は、眼病治療が目的で任地に赴く必要があったようだが、彼らは権帥としての任官であり、『官職要解』には「納言以上の人が多く任ぜられた」とある。中納言であった隆家や行成が就任を望めば、叶えられたという『栄花物語』の文脈は、首肯され得る中納言という上級公卿の特権であったのであろうか。それにしても隆家の権帥就任は、兄伊周の流罪地にその弟が再び赴くことになるという、如何なる運命の綾なのであろうか。このような史上の大貳、権帥の実情を検討するのが本稿の目的なのであるが、まずもって作り物語内でのイメージ造型を確認するとこ

ろから始めたい。

## I 物語の中の大式・権帥

継子譚として知られる『落窪物語』には、女主人公落窪の君の異母姉妹四の君の再婚相手として巻四に権帥が登場する。

おはやけのえらびにて、中納言の筑紫の帥にて下るが、にはかに妻うせたりけるを聞きたまひて、「人柄もいとよき人なり」と思しきざして、内裏に参りあひたるにも、心とどめて語らひたまひて、さるべき折に、このことのすちをはのめかしたまひければ、よきことと思ひて、「いとよきことに侍るなり」と申し契りてけり。

（小学館全集、三六一頁）

男主人公左大臣道頼が継母への復讐の一環として四の君を面白の駒と結婚させたことへの代償としてすすめられた縁談で、権帥は償いの意図を充たす夫の条件に合致していたのであろう。この話を聞いた継母も「ただの受領のよからむをがなとこそ思ひつるに、まして上達部にあなり。いといとうれしきことなり」と、大変な喜びようである。ただ受領クラスへの再縁が適当とする認識があつて、それ以上の身分の上達部である中納言の後妻だから望外の幸運とするのでは役職としての権帥への評価へはつながってこないという恨みがある。

ところで、継母ではなく乳母に虐められる『狭衣物語』（巻二）の飛鳥井君は、その亡き父が「帥中納言」であつた。現在は生計の手だてとして仁和寺の威儀師から援助を受けていた乳母が、威儀師の飛鳥井君拉致という暴挙から救った主人公狭衣を嫌い、いつしか狭衣の従者である式部大夫

道成に飛鳥井君を委ねようと画策するに至つた。そのような時道成の父が大宰大式として赴任するに際し、道成も筑紫へ同行するということになり、急きよ妻を求めることになって、乳母の意向に合致したということなのである。

そもそも飛鳥井君のもとに通う狭衣が、検非違使別当の子の少将などと身分を偽っていたために起きる悲劇なのであるが、飛鳥井君は乳母に欺かれて筑紫下向の船に乗せられてしまうことになる。通つてくる男を自分の主人とは知らずに「なま公達」と侮蔑する道成の意識に驕りがあるが、父が関白である狭衣の乳母子としての羽振りの良さを、「少々の上達部、殿上人などよりは、世の人も心ことに思ひたり」という文辞が支えていよう。これは『枕草子』に「あまた国に行きて、大式や四位などになりぬれば、上達部などもやむことなかりたまふめり」（能因本）という受領層の矜持形成につらなっているとも考えられる。

ともかくこの時点での道成の余裕は関白家の権勢を笠に着てのことと判断されるし、狭衣の乳母の夫を大式として派遣するのも関白家の意向とするところであらう。ただ『落窪物語』や『狭衣物語』では権帥や大式にまつわる権勢や利害関係が、物語の展開要因とする背景として明確には浮かび上がってこないようなのである。

それに対し『源氏物語』では、蓬生巻に窮乏著しい末摘花のもとを、大式の妻として任国へ下ることになった叔母が訪れ、故常陸宮の妻であつた末摘花の母に蔑まれていた意趣返しに、西国への同行を誘うのであつた。叔母が末摘花邸に牛車を乗りつける表情を、「よき車に乗りて、面もち気色ほこりかにも思ひなげなるさま」とか「行く道に心をやりて、いと心地よげなり」と叙するのは、小学館全集の頭注が「大宰大式として物質的

に恵まれた羽振りのよさを誇示したさま」(2)三二八頁)とする如く、いまや受領に嫁した叔母の生活状況が優位に立ち、なお夫が地方官として最高の大式として赴任することで、将来の豊かな生活が期待され、その栄光に浴している体なのである。

大式が、そうした富裕な蓄財を獲得できる実情を認めた上で、光源氏の乳母の一人に惟光の母である大式乳母が居たことに思い到ると、亡き母方に支援が期待できない現状で、さらに左大臣の婿となる元服以前の光源氏にとって、その養育が全面的に乳母に依存していたと見られる点からすれば、これをも父桐壺帝の配慮として重視せねばならないだろう。<sup>(注3)</sup>

光源氏が関係した女性の中にも大式の娘がいて、五節舞姫だったので、「らうたげなりしはや」(花散里巻)との印象をもった女であった。その大式が任果てて上京する途次、須磨に謫居する源氏を見舞った手紙の一節に、「あり知りてはべる人々、さるべきこれかれまで、来向かひてあまたはべれば、ところせさを思ひたまへ憚りはべる事どもはべりて、えさぶらはぬこと。ことさらに参りはべらむ」(須磨巻)とあり、都から須磨まで大勢が出迎にくるという、ことさら威勢を示すのである。それに大式の方は陸路であるのに、北の方と娘たち一行は船で上るというのだから、豪勢で、その莫大な蓄財も察せられるというものである。<sup>(注4)</sup>

それにしてもやはり地方官にすぎない大式が、その娘をして何とか権門に取り入るという様相は、『浜松中納言物語』にも顕著で、唐から帰国したばかりの主人公中納言に娘を差し出して、婿に迎えようとしている。この『浜松』の場合は、その人物設定が大式の娘という点ばかりではなく、中納言が寝所をともしながら受け入れないという薫的な造型と、大式がそもそも『源氏』の明石入道の、「いかにして都の貴き人に奉らんと思ふ

心深きにより」(明石巻)を模して、中納言にむけ、「昔より、これを仮にも殿の御あたりにさぶらはせむと、こころざし深う思う給へしか」(巻二)という一念を示して類同化している。<sup>(注5)</sup>

明石入道は近衛中将という京官を捨てて、播磨守として赴任し、土着した。その理由は上記の目的意識をもって、物質的利益を追求しつつ、機会を待っていたのである。若紫巻で源氏の従者良清(現播磨守の息)が語るところによれば、「そこら遙かにいかめしう占めて造れるさま、さはいへど、国の司にてしおきけることなれば、残りの齢ゆたかに経べき心がまへも、二なくしたりけり」と、国司の威光をもって広大な邸宅を構えるに至り、余生をおくるに充分な私財を蓄えたということなのである。

平安中期当時の播磨が実勢を反映する大国であり、その国司が受領層にとって渴仰の対象であるならば、<sup>(注6)</sup>いくら紫式部が羨望の呪縛に捉えられ無視したい国司像であったにしても、『紫式部日記』冒頭で「播磨守」がおそらく東三条院詮子方の碁の負け態(饗応)を「華足などゆゑゆゑしくして」奉仕経営する手腕は、一条天皇の乳母であり、彰子に誕生する敦成親王の乳付役となる橘三位徳子の夫である藤原有国をもって、この「播磨守」の該当者とするのが妥当であろう。<sup>(注7)</sup>

要するに、物語文学史上に生起する国司ないし大式像の系譜的連関と同時に、物語作者の鬱屈がどうあろうとも、史上にその経歴をもつ人物とのイメージ連繋は必然で、従来物語研究に於いてはモデル論などとして喧伝されるところであった。とくに上述の『落窪物語』と『狭衣物語』の〈帥〉に関しても、平惟仲と藤原有国とが祖上に載せられている。非参議有国は、長徳元年(九九五)に大宰大式に任ぜられ、中納言惟仲は、長保三年(一一〇〇)に大宰帥を拜命されていた(権帥でないこと後述)。斎木泰孝氏は

次のように述べている。

落窪物語巻四の作者は、帥の中納言のモデルとして、藤原有国と平惟仲を重ね合わせ、その筑紫下向については、「いと猛にて」下った有国とそれとは対照的であった伊周の配流にその材を取っているのではなからうか。

もっとも作中官職が「帥の中納言」なのだから、モデル論的には平惟仲なのであって、『狭衣物語』ではさらに巻二に於いて「帥の平中納言」と「平」が本文に付加され、なお「親たちみな筑紫にて失せにける」と、飛鳥井君の両親の動向が新たに記されている。この箇所（注9）に小学館新編全集の頭注は、「大宰帥となって任地で没した平中納言には格好のモデルがある。平惟仲（これは寛弘二年（一〇〇五）三月十五日、大宰府で没した（小右記・四月七日条）（一〇二四九頁）と指摘するのである。

『狭衣物語』が継子譚の物語形成上の系譜としてばかりではなく、平惟仲を彷彿とさせるイメージの「帥の平中納言」を飛鳥井君の父像として設定しているのかについては、『狭衣』作者も参加した天喜三年（一〇五五）五月三日の六条斎院祓子内親王家物語歌合に『菖蒲かたひく権少将』を提出した大和が、三条院太皇太后宮嬪子女房で、惟仲の娘だったからなのである。（注9）

物語はその時代設定や事象を深遠な準拠とする場合もあれば、物語作者の卑近な人物の血縁関係を振り入れたりもするのである。『源氏物語』にしても源氏の須磨明石流離に大式との接触や、その前後の花散里巻や滯標巻に大式の娘五節に言い及ぶのは、伊周の配流との対照を周辺人物をもつて確実に想定しているからであって、有国や惟仲のイメージをもつて、明石入道や大式が造型されていると看做せよう。もちろんそれは『紫式部日記』に、惟仲の養女に注目して、次のように記されているからでもある。

五節の弁といふ人はべり。平中納言の、むすめにしてかしづくと聞きはべりし人。絵にかいたる顔して、額いたうはれたる人の、まじりいたうひきて、顔もここはやと見ゆるところなく、いと白う、手つき腕つきいとをかしげに、髪は、見はじめはべりし春は、丈に一尺ばかり余りて、こちたくおほかりげなりしが、あさましう分けたるやうに落ちて、すそもさすがにはめられず、長さはすこし余りてはべるめり。

（小学館全集 二二九頁）

惟仲は寛弘二年（一〇〇五）三月大宰府で没した。養父の死による傷心のためか五節の弁の豊かな髪が抜け落ちてしまったという。萩谷朴『紫式部日記全注釈下巻』（二九二頁）は、その豊かな髪や色白、腫れぼったい額つき等の容貌描写に末摘花との近似性を認めているが、「五節の弁」という呼称からすれば、かつて五節の舞姫（一条天皇踐祚の年か）をつとめたことのある美形の彰子付き女房ということになる。惟仲の娘には、伊周息の道雅の妾で、のちに藤原義忠の妻となった前記した大和（大和宣旨）と、

『尊卑分脈』に拠ると、もう一人、源頼光の妾で、頼家の母が知られる。

新田孝子氏の考証によれば、実父は藤原忠信で、養父が惟仲と考えられ、（注10）五節の弁が頼家の母であることはまず間違いないから。頼家は『狭衣』作者宣旨の叔父であるから、惟仲やその娘たちは物語作者、いや宮仕えする女房たちにとっても関心の的であったに違いなく、作者はそのような親しい血縁関係の枠組で、物語に人物や事蹟を踏まえて取り込んでいる可能性がみえてくるのである。

因に紫式部の夫となった宣孝には、式部との結婚当時、既に下総守藤原顕猷女、讃岐守平季明女、そして中納言藤原朝成女などの妻があり、それぞれに子を儲けていた。その中の娘の一人は、道雅が惟仲の娘と別れた後

に關係をもったようで、二人の間に女子が誕生した。『和歌色葉』によると、それが彰子に仕えた上東門院中将であつて、井上宗雄氏は、断定する証はないしながらも、「永承六年夏と推測されている祿子内親王歌合にみえる道雅三位女とはまず同一人物と思われる」とする。<sup>(注11)</sup>

## II 大式藤原有国

摂政専任の身分となつた兼家が政權運営上、太政官行政の要として弁官機構を直接掌握する方策を用い、<sup>(注12)</sup>とりわけ家司である有国と惟仲の二人を重用し、兩人は兼家の腹心となつた。しかし、有国は兼家の後継者として道兼を推したため、摂政となつた道隆に永祚二年(九九〇)八月三十日の除目に於いて藏人頭と右大弁の要職を剥奪されるという憂き目にあう(公卿補任<sup>(注13)</sup>)。その有国が次代の覇者道長政權での復活を『栄花物語』(巻四、みはてぬゆめ)は、次のような形で書き記している。

(イ)まこと、かの押い籠められし有国、このごろ宰相までなさせたまへれば、あはれにうれし、世はかうこそはと見思ふほどに、このごろ大式辞書奉りたれば、有国をなさせたまへれば、世の中はかうこそはあれと見えたり。帝の御乳母の橘三位、北の方にいていと猛にて下りぬ。これぞあべいこと、故殿(兼家―筆者注)のいとらうたきものにせさせたまひしを、故関白殿(道隆)あさましうしなさせたまひてしかば、めやすきことと、世の人聞え思ひたり。惟仲はただ今左大弁にてゐたり。  
(小学館新編全集、①二三五頁)

『栄花物語』にはつごう六箇所の有国関連記事があり、その中四箇所は惟仲と併記されている。そして関白道隆の惟仲厚遇に対する有国冷遇を、

『栄花』作者は批判し、有国には同情を寄せているのである。とはいえ、引用箇所の「このごろ」前後の二文が、参議となつた長保三年(一〇〇二)十月三日と、長徳元年(九九五)十月十八日に藤原佐理にかわつて新たに大宰大式に任ぜられる六年の隔りを無視するかのような文脈で、要領を得ない訳だが、ともかく非参議ならばなおさら望<sup>(注14)</sup>んでも望むべくもない大式の職に就いたことの意義は大きいはずである。長年の散位による困窮もこれによって一挙に癒されるばかりではなく、それ以上の余りある富裕が確約されるから、北の方橘三位徳子は有頂天なのであろう。しかし、「猛にて下りぬ」とある、その下向時期までの経過も実は無視されていた。

有国が大式に任ぜられたのは長徳元年だが、実際に下向したのは長徳二年(九九六)八月九日以降のことであつた。『小右記』によれば、八月九日は有国の任符および位記が作成されているが、それに先立つ八月二日には宮中に於いて餞席が設けられ、有国は正三位に加階された。これは通例の赴任賞昇叙ではなかつたのであろうか、実資は「足驚奇者也」と『小右記』に記し呆れている。また八月七日には道長邸での餞席の様子が以下の如く叙されている。

参左侍、依御消息、被餞大式、有伯銭事、臨晚有和哥、藤中納言・左武衛・左大臣・宰相中将・勘解由長官等也、非参議不説和哥、夜閑専馬一疋・女装束・釧等、又給掛一襲・袴於貞副朝臣、又家主脱衣、被基隆朝臣、未得其意、  
(小右記(大日本古記録本))

出席者は中納言道綱、左兵衛督公任、左大弁惟仲、宰相中将齊信、勘解由長官源俊賢等であつた。夜になって興が乗つたのか、有国に馬一疋、女装束、釧等が与えられたばかりではなく、その息貞嗣には掛一襲・袴を給い、また基隆には道長の着衣が被けられた。有国一統へのこの道長の異常

な氣遣いはいったい何を意味しているのか。実資ならずとも「未得其意」とは至極当然の疑問であろう。

この有国が大宰大貳に任命された長徳元年及び任地に下向する運びとなつた長徳二年は、政治的に激変期で、いわゆる長徳の変が起きた時期なのである。事の発端は、長徳二年一月十六日、故為光の姫君たちをめぐつて花山院と伊周・隆家方との闘乱で、一条天皇みずからが伊周・隆家の罪科を糾弾し、四月二十四日には内大臣伊周を大宰権帥に、中納言隆家を出雲権守と為す左遷の宣旨が下つた。<sup>(注15)</sup>ところが伊周・隆家兄弟はなかなか勅命に従わず、一時伊周は播磨国にとどまつた。九月には播磨守が詮子・道長に近い源時明に替わり、十月十日に伊周が密かに入京していたことが発覚し、再び大宰府への追下が命じられたのである。つまり有国の大宰赴任がこうした政情と対応しているのであり、有国は道長の何らかの密命を帯ていたといえよう。これらの点を悉に検討された川田康幸氏は次のようにまとめている。<sup>(注16)</sup>

有国大宰大貳補任の本質は、有国と道長の結びつきから考えて、道長が伊周を大宰府に配流する為の布石であり、有国は道長の意図に添つて大貳を勤めたものと、解釈できよう。大宰府にあつても有国の耳目は、正に京の道長の耳目であり、有国は道長の指示通り、適切に動いたのである。自分の裁量にまかされている地方官の範囲に於いては、当時の国司達の通弊の如く、いやそれ以上の苛斂誅求な政事を行ない、私財を貯め込んだと見られる。

ただ有国の大貳補任を「道長が伊周を大宰府に配流する為の布石」とまでは言い切ることはできないにしても、長徳二年八月七日以降の大宰府下向は、道長の意向に従つたことはまず間違いないであろう。それが『栄花

物語』(巻五、浦々の別)の語るようなことだったのかどうか、疑わしくもある。長文に互るが当該箇所を引用しておく。

(四)やうやう筑紫近うおはしたれば、国々の駅家の、使の御まうけども、いと真心に、泣く泣くといふばかり仕まつりわたす。今は筑紫におはしましつきたるに、そのをりの大貳は有国朝臣なり、かくと聞きて、御まうけいみじう仕うまつる。「あはれ、故殿(道隆)の御心の、有国を罪もなく怠ることもなかりしに、あさましう無官にしなさせたまへりしこそ、世に心憂くいみじと思ひしに、有国が恥は恥が恥にもあらざりけり。あはれにかたじけなく、思ひもかけぬ方にも越えおはしましたるかな。公の御掟よりはさしまして、仕うまつらむとす」など言ひつづけ、よろづ仕うまつるを、人づてに聞かせたまふもいと恥づかしう、なべて世の中さへ憂く思さる。御消息、わが子の資業<sup>よしなり</sup>して申させたり。「思ひがけぬ方におはしましたるに、京のこともおぼつかなく、驚きながら参るべくさぶらへども、九国の守にてさぶらふ身なれば、さすがに思ひのままにえまかりありかぬになむ、今までさぶらはぬ。何こどもただ仰せごとになむ随ひ仕うまつるべき。世の中に命長くさぶらひけるは、わが殿(兼家)の御末に仕まつるべきとなん思ひたまふ」とて、さまざまの物ども、櫃どもに数知らず参らせられた、これにつけてもすぞろはしく思されて、聞き過ぐさせたまふ。そのままにただ御斎<sup>とま</sup>にて過ぐさせたまふ。

(①二六六頁)

有国は、伊周に対して、その父道隆が官を剥奪したことへの怨念を捨て、「わが殿(兼家)の御末に仕まつるべき」と、あくまで兼家の恩寵を受けた家臣として、その孫である伊周に仕えるべく、「公の御掟によりはさしまして」、誠意をもって奉仕するのだという。『栄花物語』が描く、この有

国の伊周への厚遇を従来はほぼ信じていたが、川田氏は「有国の徳を描くことは、その後楯であり、直接の支配者でもある、時の一人・道長を讃美することにもなるう」として、『栄花』の方法との認識を示し、これを「作法的な叙述」として、「有国は罪人に対する規定通りに厳しく伊周を処遇したと考えるのが、事実に近い見方と言えるのではないか」と、異を説いた。<sup>注(17)</sup>

確かに有国の伊周への厚遇を、『栄花物語』の誇張的潤色とすることに筆者も首肯されるのだが、それが直に「罪人に対する規定通りに厳しく伊周を処遇した」ことになるのかどうか疑わしいのである。前記した異常とも思える饒席に於ける道長の有国への気遣いはいったい何であったのか。それが伊周を厳しく処遇するという密命であったのかということである。

伊周は重病の母貴子を見舞うため播磨から朝廷の許可なく密かに入京して一時その行方が知れなかったから、有国がよく監視をし、伊周に不審な動きでもあれば、直に京へ情報をもたらすぐらいのことは道長から厳命されていただろう。ただそれだけであれば、有国に大宰赴任を促し、特別に接待することでもあるまい。むしろ定子が身重であり、誕生する御子が皇子でもあれば、伊周の存在意味は測り知れないから、粗略には扱えないところである。

しからば、道長の密命とは何であったのか。長徳元年は関白道隆、道兼、左大臣源重信等が没し、激変の年であった。道長は突如、権大納言で内覧の宣旨を受け、右大臣に昇った。そして長徳二年七月二十日には左大臣に転じたのである。左大臣道長が大式有国に期待したこととはいったい何であったのか。それは、既に今井源衛氏が述べているように、農民等からの徴収収奪であり、「それを私的に権力者へ提供する」ことだったのである。<sup>注(19)</sup>

有国の大宰府での悪行擄取は何ら咎められず、帰京後、参議に列したものである。有国が京へ帰還したのは、長保三年（一〇〇二）のことであったが、伊周は既に長徳三年（九九七）、女院詮子の病氣平癒を期した非常赦で道長、詮子の同意のもと一条天皇の勅定によって召還されていたのだから、有国赴任が伊周対策でないことは歴然としているのである。『栄花物語』は帰京後の有国が、東三条院詮子の委嘱によって、中関白家の係累、皇后定子の遺子である脩子内親王、敦康親王、嵯子内親王の三人の後見を務めたと語り伝える。慈悲の如く中関白家一統に有国の収奪が還元されたにしても、それは詮子・道長の意向によるのだから、まさに有国の大式就任の意図を証明することにもなっているよう。

有国の後任が、平惟仲であった。既に近江国等の国司として強盗に襲われるほど莫大な財を貯えてきた惟仲が何故有国の後を襲ったのか、これも腑に落ちない点である。両者は兼家の「左右の御まなこ」（栄花）として弁官職で互いに競い合うようにして地歩を固めてきた。それが関白道隆による有国の官剥奪によって常に惟仲の一步前をすすんでいた有国との立場が逆転することになった。有国が右大弁の職を停められて、その後右大弁に任ぜられたのが惟仲だったが、前掲引用した『栄花』(イ)の有国大式補任時、つまり長徳元年（九九五）当時、惟仲は従三位参議兼左大弁であり、翌長徳二年七月二十日には権中納言に昇叙した（公卿補任）。有国が帰京した長保三年（一〇〇二）には惟仲は正三位中納言であって、有国はようやく十月三日に参議となったにすぎない。

有国と惟仲との関係がどのようなものであったのか。道長政権下に於いて、その処遇に特別な優劣の差はないのである。<sup>注(20)</sup>ただ有国が一条天皇の乳母橘三位徳子を妻にしていたものだから、惟仲も同じく一条天皇の乳母で

ある藤三位繁子（帥輔女、道長の叔母）と関係をもつようになったと思われる。時に繁子は道兼の未亡人<sup>注(21)</sup>で、尊子の母であり、長徳四年（九九八）、尊子の入内時には惟仲が万端を用意したようである。

ところが、惟仲に孤立化を深める定子の中宮大夫の役が命ぜられたのが、長保元年（九九九）正月のことであり、同年七月にはやくも辞任する。

定子側との接触を避けてのことであろう。弟生昌がかつて中宮大進であった縁で、長保三年（一〇〇一）八月九日、定子は生昌邸に移御した。『枕草子』「大進生昌が家に」（三巻本第六段）に於いて描かれ、敦康親王出産のための行啓であった。つまり本来は中宮大夫として惟仲が定子の行啓をおぐ立場にいたということなのである。まずは中宮大夫辞任の理由が、道長方に身を置きたい惟仲の姿勢を示していたといえよう。<sup>注(22)</sup>

妻にした繁子が東三条院詮子の女房でもあった縁で、詮子は長保二年（一〇〇〇）七月十三日から十二月十五日まで惟仲邸に滞在している。しかし、惟仲としてはもう少し道長への奉仕を尽し貢献度を上げたかったのではあるまいか。ライバル視していた有国が大宰大貳を終えたこともあって、中納言の惟仲は少なくとも上位の権帥での赴任が可能となるのを見込み望んだのであろう。長保三年（一〇〇二）正月に帥に任ぜられる。しかし、寛弘元年（一〇〇四）十二月二十九日、宇佐八幡宮の宮司の内紛に介入したことから、帥職を停止されている。これは有国の前任者大貳藤原佐理が正暦五年（九九四）十月二十三日、同じく宇佐宮神人との争いがあり、その理由で解任されるに至っていたのである。

皮肉なことに惟仲は二度と京の地を踏むことができなかった。ライバルとしての有国と惟仲は、最後に道隆没後の中関白家一統との関わりに於いて、その人品の評価に差がついたといえようか。

藤原佐理 正暦二年（九九二） 従三位参議 大貳

← 藤原有国 長徳元年（九九五） 従三位非参議 大貳

← 平 惟仲 長保三年（一〇〇二） 正三位中納言 帥

### III 権帥藤原隆家

そもそも惟仲は、大宰の〈権帥〉なのか、それとも〈帥〉であったのかの議論がある。黒板伸夫氏は『北山抄』に「惟仲任帥之時、為尊親王任<sup>三</sup>他官、…」とある記述を組上に据えて検討され、惟仲が正帥として補任したのみならず、為尊親王を他官に遷すという強引な人事が実行されたとして、次のようにまとめられた。<sup>注(23)</sup>

中納言平惟仲は長保三年正月二十四日に大宰帥に任ぜられた。これは権帥でなく正任の帥であり、当時ではすでに「帥」は親王が在京のまま任ぜられ、大宰府には公卿が「権帥」または「大貳」として赴任するという形が慣例化していたことからみて異例の人事であり、しかもその時に大宰帥を兼帯していた彈正尹為尊親王の兼官を他に代えるという強引なやり方でもあった。

この理由については、これより以前の長徳二年に内大臣藤原伊周が罪を蒙り、大宰権帥の名目で配流され、惟仲の補任時には既に召還されて居り、権帥の名は帯していなかったらしいが、罪人としての彼が帯した「大宰権帥」を惟仲が忌避し、強いて正帥補任を望んだものと思われる。



以後、本稿に於いても平惟仲は〈権帥〉ではなく〈帥〉であったと、あらためて認識しなおすこととしたいが、引用した黒板(B)論考では、惟仲が〈権帥〉ではなく〈帥〉を望んだ理由として、流罪の伊周が〈権帥〉であったので、それを忌避したのだとする。しかし、黒板(A)論考に於いては、この理由は明記されず、ただ「彼と藤原兼家の家司時代以来のライバルである大式藤原有国にかわって、臣下としては当時異例の正帥として任地に赴いた惟仲の得意は思うべしである」としていた。筆者は惟仲が正帥を望んだ背景、理由として、やはり有国へのライバル心で、それも常に有国の後塵を拝していた意識を払拭するために歴然たる差をもって、つまり〈権帥〉ではなく〈帥〉として大宰の地に赴任することが第一の理由であつたろうと思われる、第二の理由として、罪人伊周と同じ〈権帥〉であることを忌避したのであらうと考へたい訳である。というのも、後者の理由は、源経房や藤原隆家にも波及する視点を抱えているといえるからである。

前掲(A)論考に於いて、黒板氏は『類聚符宣抄』第七「大宰帥兼仗隨身事」の項に、長保三年(二〇〇二)五月二十九日、平惟仲の兼仗を給うべき官符及び隨身に食馬を給すべき官符には「中納言兼大宰帥」と記すのに対し、長和四年(二〇一五)四月七日の藤原隆家には「中納言兼大宰権帥」と記してあること、そして異本『公卿補任』では惟仲に「帥」と記しているのに対し、隆家には「権帥」と明確に区別していることに着目し、それを指摘していた。ところが、論考(B)に於いて、「大宰員外帥あるいは権帥として配流された凶例を忌んだ」という視点で、左大臣源高明とその息源経房の事例を捉らえて、『小右記』寛仁四年(一〇二〇)十一月二十九日条に「大宰帥権中納言経房」と記してあり、また同日条の異本『公卿補任』には「兼大宰帥・停大夫」とあることを指摘して、「経房が正任であつた

可能性を考え得る」と述べているのである。

惟仲の場合は忌避すべき中関白家との関係であつたが、源高明と経房は父子関係で、同じ〈権帥〉であることを凶事と認識するのだろうか。むしろ無実の罪を負ったという意識で、あえて父と同じ〈権帥〉であるべきことを考え得る立場にあるともいえよう。そして黒板氏が史料として挙げる流布本『公卿補任』の祖形とみられる異本『公卿補任』には、経房の前任者藤原行成及び前任者藤原隆家を「権帥」と明記して区別しているとまで指摘しながら、隆家に関して最後にこう言い及ぶのである。

なお治安三年、すなわち藤原隆家が中納言を辞した年の同書の記載に、「長暦元年八月九日任大宰帥」とある。平行親記にも「大宰帥隆家」とあり、すなわち彼も大宰府に再任したときは正帥に任じたのかもしれない。

摂関家の上流貴族である伊周と隆家は親しい実の兄弟であり、惟仲のように受領からその財力と如才な中で中納言まで成り上がった公卿とは、おのづから考えるところも異なろう。本節では長元十年(一〇三七)の再任時に於いて隆家が〈帥〉であるのか、それとも〈権帥〉であるのかの議論に結着をつけようとする意図はなく、むしろ平惟仲が〈権帥〉ではなく〈帥〉であつたことさえ、最新の成果を採り入れてあるはずの小学館新編全集『栄花物語』でも採用していないことゆえ、あくまで黒板氏の提言はそれとして隆家が初任時に於いても〈帥〉である可能性をも念頭に置きながら、慎重を期して『栄花物語』や『大鏡』での隆家に関する記述を中心に考えてみようと思うのである。

『栄花物語』は伊周・隆家の召還を女院詮子の病悩快癒のための恩赦であつた事実を偽り、定子の敦康親王誕生ゆえとする潤色を施していること

はよく周知されている。それは敦康の後見の重要性を浮上させるための物語としての虚構的布石となっていて、とくに長保二年（二〇〇〇）定子没後、敦康は妹の御匣殿（道隆四女）を経て、彰子の手に委ねられることになる。道長も彰子に皇子誕生をみない限り、敦康を兼家流の東宮候補として大切に養育する方針で、寛弘二、三年（二〇〇五、六）頃は、敦康は道長の土御門邸に居て、その保護下にあったことが知られる。<sup>注24</sup>

その頃、伊周は准大臣、隆家は権中納言として復官していて、<sup>注25</sup>道長に恭順の姿勢を示していたが、道長と伊周との関係は必ずしも良好とはいえず、それに対し隆家は親しく交わっていたようである。

中納言は大殿（道長―筆者注）につねに参りたまひて、また見えたまはぬをりは、たびたびまづはしきこえたまひつつ、にくからぬものと思ひきこえさせまたひて、この君（隆家）はにくき心やはある、帥殿（伊周）の賢さのあまりの心にひかるるにこそなどぞ思はしめしける。

（栄花、巻八はつはな。三六六頁）

こうした隆家の道長との円満な交流が、<sup>おね</sup>阿り諂う巧みな世渡りというよりも、隆家の裏表のない性格や楽天的な気質によるところであろうと推察される。寛弘六年（二〇〇九）、彰子の敦成親王誕生に際しても、伊周のみは「よろづに世とともに思ひ乱れたる世の憂さ」（巻八はつはな）と認識する。確かに全ての情況は中関白家側にとって暗転していたが、伊周はそれらをまともに身に受け、自らを追い込んでいったとおぼしい。伊周は病悩を悪化させ、寛弘七年（二〇一〇）正月二十九日薨ずる（権記・栄花）。同年七月十七日には敦康親王が元服した。敦道親王没後のことだったので、大宰帥に任じられ、帥宮と呼ばれるようになっていた。

一方、一条天皇も寛弘八年（二〇一一）五月頃より病気がちとなり譲位

の運びとなる。同年六月十三日、一条天皇譲位、三条天皇（居貞親王）受禪で、皇太子は定子腹の第一皇子敦康親王ではなく、彰子腹の第二皇子敦成親王が立太子したのであった。

隆家は最後まで敦康親王の立太子に望みをかけていたが、道長の意をうけていた敦康親王家別当である藤原行成の一条天皇説得工作が実り、敦成親王の立太子実現をみたのである。<sup>注26</sup>

こうした政情を踏まえた上での隆家の大宰府への赴任とすると、眼病治療が目的であったとはいえず、京に居たたまれない気も起きたことであろう。当該箇所を『大鏡』から引用する。

御目のそこなはれたまひにしこそ、いといとあたらしかりしか。よろづにつくろはせたまひしかど、えやませたまはで、御まじらひ絶えたまへる頃、大式の闕出できて、人々望みののしりに、唐人の目つくるふがあなるに、見せむと思して、「こころみにならばや」と申したまひければ、三条院の御時にて、またいとほしくや思し召しけむ、二言となくならせたまひてしぞかし。その御北の方には、伊予守兼資のぬしの女なり。その御腹の女君二所おはせしは、三条院の御子の式部卿の宮の北の方、いま一所は、傳の殿の御子に宰相中将兼経の君、この二所の御婿をとりたてまつりたまひて、いみじういたはりきこえたまふめり。

（道隆伝。小学館全集、二八五頁）

眼疾の悪化を理由とするのは『栄花』も同じだが、隆家が「御まじらひ絶えたまへる頃」と隠居状態にたち至ったことは、それを口実にしたとまでは言えないまでも、たぶん敦康立太子の挫折による落胆失意が原因とみた方が適当で、『大鏡』はさらに三条天皇も眼病であったことを引き出して隆家の大宰府赴任を実現させている。その上、隆家の二人の娘婿に三

条天皇第二皇子である敦儀親王と、「傳の殿」つまり道綱の三男兼綱（但し道長の猶子）をむかえているのであり、この二人の婿を「いみじういたはりきこえたまふ」では、たいそうな出費が考えられるところで、これも前記したように行成が道長の息長家を婿にむかえたため大式を望んだという『栄花』の記述に対応するとみられるから、隆家の就任意図にも当然こうした事情をも含むものと考えられるのである。

隆家が長和三年（一〇一四）十一月七日に権帥に補任された時、敦康親王が帥であったはずで、長和五年（一〇一六）一月二十九日、後一条天皇（敦成親王）が受禪し、式部卿宮であった敦明親王（母城子）が立太子するから、その後敦康が式部卿になったようで、まずは隆家が権帥であったことは疑いないであろう。赴任は翌長和四年（一〇一五）四月二十四日であった。

ところで、落ち込んでいるはずの隆家の執務ぶりは、前掲『大鏡』が続けて、「政よくしたまふとて、筑紫人ながら従ひまうしたりければ、例の大式、十人ばかりがほどにて、上りたまへりとこそ申ししか」（二八六頁）という具合で、ふつうの大式の十人分ぐらいの実績をあげたという。眼病などもどこ吹く風という精勤であったようだ。

その六年目の最後の年、すなわち寛仁三年（一〇一九）四月のことだが、壹岐・対馬を刀伊国の賊が多数来襲し、放火掠奪を行い、住民を殺害あるいは拉致したが、隆家は大宰府管轄の九か国の武士を指揮し、これを撃退し、連れ去られた日本人を高麗国の手を借りて救出したのであった。<sup>注(27)</sup>古代史上へ刀伊の入寇と呼ばれる大事件を解決に導いた功績は、特筆に値しよう。このような隆家は「大和心かしこくおはする人」として道隆流の名望をたもち、左大臣道長にも捨て難い人物と思われたが、帰京後は再び引

きこもってしまった。つまり、隆家の大宰府赴任は、中関白家の生き残りとして京から排除しようとしたのではないことは確かなようだ。

寛仁三年（一〇一九）、隆家の後を引き継いだのが藤原行成であったが、北九州沿岸の海賊の横行や高麗国の脅威に臆したのか、行成は赴任せぬまま、翌寛仁四年（一〇二〇）四月末に辞任した。

実は隆家が大宰府下向に際し、定子の遺児である一品宮脩子内親王の万事を源中納言経房に依頼して旅立ったと『栄花物語』（巻十二、たまのむらぎく）は語り、さらに敦康親王が寛仁二年（一〇一八）十二月に薨去した際には、葬儀の準備を陰ながら支えたようである（巻十四、あさみどり）。

五巻の日は御遊びあるべう、船の楽などよろづその御用意かねてよりあるに、明日とての夜より聞しめせば、「式部卿宮（敦康）うせたまひぬ」とののしる。（略）「帥中納言（隆家）さへはるかにおはするをり、心憂く」と思ひのたまはす。誰こまやかに何ことも仕うまつらんと、あはれに思ひきこえさする人々多かり。源中納言（経房）ぞ一品宮の御事も仕うまつりたまへば、よそながらもさるべきさまに掟て仕うまつりたまふ。<sup>注(28)</sup>（二一六〇頁）

盛大に営まれている道長の法華八講の五巻の日、つまり十二月十七日の昼過ぎに、二十歳の親王は急逝する。葬儀の万事は故親王室が頼通室隆姫の妹であったので、頼通側で取りしきったようだが、叔父の隆家が大宰府に居て不在であるから、おそらく経房は隆家の名代として葬儀に関与したのであろう。帰京後の隆家が再び引きこもったのも首肯される、親王の他界であった。

もっとも隆家と経房が何故こうした堅い親交を結び得たのか不明とする他なく、いくら経房が清少納言にとって気の許せる相手であったからとい

って、隆家との関係は『枕草子』にみえない。さらに経房は源高明息男だからとはいえ、師輔五女愛宮腹であり、実姉明子が道長室（高松の上）となっていた関係で、道長の猶子でもあった。こうしたことから言えば、道長と隆家との友好関係が切り拓かれた流罪後、中関白家に対してもともと同情の念を寄せる経房との関係もいっそう進展したのかとも思われる。

道長は妍子を尚侍を経て、三条天皇がまだ東宮であった頃入内させた。

妍子は長和元年（一〇二二）二月十四日立后したが、その中宮大夫となつたのが道綱であり、中宮権大夫が源経房であったから、前記した如く隆家が二人の娘婿として、三条天皇の敦儀親王と道綱の三男兼経をむかえていた関係もあって、経房とも接点があり、二人の交渉も自然と深まっていったのであろう。かつて、つまり長徳二年（九九六）のことだが、花山天皇奉射事件の主謀者であった隆家と、その後花山院の別当となった道綱、そして経房とが一グループを形成していた可能性がある。隆家が大宰府への出立の日、「中宮（妍子）もとより御心寄せ思ひきこえさせたまへり」（栄花、巻十二、たまのむらぎく）とあって、餞別の装束が妍子方から贈られている。『栄花』が「もとより」とする理由は不明だが、三人の交渉圏として妍子周辺が考えられるところである。さらに隆家息男の良頼と経房女とが結婚し、両家は姻戚関係となっていくのである。<sup>注(29)</sup>

隆家と経房との奇き縁は、正二位権中納言経房が行成の跡を継いで寛仁四年（一〇二〇）十一月二十九日、大宰権帥に就任したことで極まるといえよう。経房にとって父高明が流罪となった地の大宰府へ赴くことは、兄伊周の謫居を追体験した隆家からの慇懃があったのかもしれない。<sup>注(30)</sup>いま親友となった経房と隆家の深き紐帯は、大宰の地であったことが確認された訳だが、それが二人を永遠に切り離すことにもなった。経房は治安三年

（一〇二三）十二月十二日、大宰の地で没した。その年は、良頼と経房女との間に良基が誕生した年でもあった。そのような友を慕ってか、隆家は長暦元年（一〇三七）八月九日、大宰権帥に再任され、再び大宰府にむかっていたのであった。

つまり隆家が再任された情況下に於いては〈帥〉である必要は全くないといえようし、隆家の二度の大宰府赴任は、いずれも死地を求めていくような趣が感じられてならない。

平 親信 寛弘七年（一〇二〇） 従二位非参議 大貳

藤原隆家 長和三年（一〇二四） 従二位中納言 権帥

藤原行成 寛仁三年（一〇一九） 正二位中納言 権帥

源 経房 寛仁四年（一〇二〇） 正二位権中納言 権帥

#### IV 大貳源資通

経房の後任の大貳は、非参議藤原惟憲で、治安三年（一〇二三）十二月十五日に任ぜられた。それより七年間、長元二年（一〇二九）正月二十四日までその任にあったから、惟憲の妻の藤原美子は、後一条天皇の乳母として当初近江三位と呼ばれていたが、その後大貳三位の呼称をもってするようになっている。

つまり後一条天皇女一宮章子内親王の着袴の後宴に参列した乳母たちを、

『栄花物語』（卷三十一、殿上の花見）が、「内の御乳母たち、大式の三位、美作の三位、上野など皆参りて、打出でさぶらひたまふ」と記す、「大式の三位」は藤原美子なのである。<sup>注31</sup>因に「美作の三位」とあるのは、道綱女の藤三位豊子のことであり、その子の定経が長元九年（一〇三六）頃に美作守となっているのによる呼称なのである。

ともかく惟憲は甲斐や近江守を歴任した受領層であり、道長の家司として勢力を振るったのであり、妻美子が既に天皇の乳母であって、その後大式に就任したとはいえ、その処世の根源は財力であったことに揺るぎはなからう。つまり、前述した有国や惟仲の場合と同然で、二人の妻がともに一条天皇の乳母であり、それぞれ橘三位（徳子）、藤三位（繁子）と呼ばれていた。『枕草子』に「かしこきものは、乳母の男こそあれ。帝、皇子たちなどはさるものにて」（三巻本、八二段）とある如く、天皇の乳母の夫が大式として羽振りをきかす構造がみえるのだが、しかし、それは摂関家との癒着に根差していたというのが、この時代の真相であろう。

また栄達勢威の獲得は、大式とその妻である御乳母との相互依存関係で、これも『枕草子』に、受領を歴任して「大式や四位などになりぬれば、上達部などもやむことなかりたまふめり」とあり、女の方は、「内わたりに、御乳母は、内侍のすけ、三位などになりぬれば、重々し」（能因本、一八四段）とある。時に清少納言の批判となるが、それは裏を返せば、嫉妬羨望であろう。乳母が女官としての最高職の典侍となり、三位を叙位される。

大式三位である藤原惟憲の妻美子も寛仁元年（一〇二七）十一月十一日、典侍に任ぜられて（左経記）、江典侍とも呼ばれている時期がある。ただこのような呼称は、同一人物か別人かの混乱をきたす場合もあって、前記した藤三位にしても道綱女で大江清通妻豊子であるのか、それとも道兼の

薨後、惟仲の妻となった藤三位繁子なのか、同時期に存命していれば、「先の藤三位」などとして区別する他なからう。<sup>注32</sup>大式三位にしても、もう一人著名な後冷泉天皇（親仁親王）の乳母となった賢子がいる。すなわち、紫式部の娘賢子なのである。

長保元年（九九九）、宣孝との間に生まれた賢子は、二十代前半には母の後に続いて彰子の元に出仕していたようで、生母嬉子（彰子と同母妹）を亡くした親仁親王が彰子に引き取られたことで、万寿二年（一〇二五）に乳母に任ぜられた。当時の夫は権中納言兼左兵衛督藤原公信（為光の六男）で東宮権大夫の任にも就いていて、将来に期待をもてたが、惜しくも万寿三年五月十五日に薨じる（公卿補任）。その後間もなく、賢子は一転して受領層の従五位上東宮大進高階成章と再婚する。親仁親王が寛徳二年（一〇四五）即位して後冷泉天皇となると、賢子は典侍に任ぜられ、従三位に叙せられたのである。後夫成章も、天喜二年（一〇五四）十二月二日、大宰大式に任ぜられ、翌年七月十九日に赴任賞で従三位に叙せられた。当初賢子の呼称は「越後の弁」とか「弁の乳母」とか呼ばれていたが、その夫の官によって「大式三位」と呼ばれるようになったのである。

萩谷朴氏は『紫式部日記』を娘賢子への家訓・庭訓を記すと捉らえる視点から、後一条天皇（敦成親王）の乳母となった藤三位典侍豊子とその道綱の親族には好意をもって描くが、一条天皇の乳母橘徳子とその夫たる有国一家とは、日記冒頭からして、播磨守有国の暮の負け態の当日、「たいした用事でもあるまいに、せっかくの負け態にも列席せずして宿下りし、帰参した後日、その洲浜の和歌一首をよすがに、遠い天祿の乱暮歌合の勝ち態・負け態の扇に回想の筆をそらせてしまう」（全注釈、一〇四頁）という。つまり紫式部が「有国一家の栄達を羨望嫉視するがゆえに、これを意

識的に無視する態度に出ている」とされる。

さらには素行のよくない弟の藏人兵部丞惟規の立身に腐心する式部は、寛弘七年（一〇一〇）師走に中宮御所に盗賊が侵入した時、手柄を弟惟規に立てさせようとするが不在で、徳子腹の有国の男式部丞資業に功名を横取りされてしまう。弟を名指しで「恥も忘れて口づから」呼びにやらせたのにも拘らず、この仕儀で、「つらきことかぎりなし」とは「その無念残念をむき出しにした日記の文章」だと秋谷氏はいう。<sup>注33</sup> また土御門邸行幸で一条天皇の陪膳役を勤める橘三位徳子自身の衣装についても、「青いろの唐衣、唐綾の黄なる菊の桂ぞ、表着なんめる」と記すのは、「徳子の夫藤原有国が、長徳元年十月十八日から長保元年閏三月五日まで、大宰大式を勤めていたことからしても、舶載の唐物を豊富に所有していたであろう」（全注釈上巻、四〇九頁）とし、「その布地に舶載の唐綾を用いていることが自慢で、それを目だたせるために、表着や打衣を重ねることを故意に避けたのであろう」（四一〇頁）との理会を示している。

このように天皇の乳母となり、従三位典侍の官位を得、得意然としている徳子の姿と有国一家の勢威をみせつけられていた紫式部が、その娘賢子に、かくあるべき女官としての栄達を目ざす遺訓とするために残した日記だとすれば、その通りに賢子は、三位典侍で、夫成章が大宰大式となり、母式部が地団太を踏んで打ちのめされた夢を、まさに実現した「大式三位」の呼称なのであった。

ところで、熱烈な『源氏物語』の読者であり、また『紫式部日記』の読者でもあった菅原孝標女も賢子と同様な夢の実現を期したが、はかなく挫折したことが『更級日記』に書きとめられている。<sup>注35</sup>

年ごろ「天照御神を念じたてまつれ」と見ゆる夢は、人の御乳母して、

内裏わたりにあり、みかど、後の御かけにかくるべきさまをのみ、夢ときもあはせしかども、そのことは一つかなはでやみぬ。ただ悲しげなりと見し鏡の影のみたがはぬ、あはれに心うし。かうのみ心に物のかなふ方なうてやみぬる人なれば、功德も作らずなどしてただよふ。

（小学館全集、三五九頁）

孝標女はまがりなりにも祐子内親王家に出仕したから、「人の御乳母」が親王ないし内親王の乳母としても、その指定は親王の乳母となることであつたろう。当然乳母となった親王が即位すれば、自身は典侍となり、<sup>注36</sup> 天照御神を日常的に祈ることができる立場となる。

というのは、「わが念し申す天照御神は内裏にそおはしますなるかし」と、内侍所、温明殿に奉納安置する神鏡が、他ならぬ皇祖神で伊勢神宮に鎮座する天照御神の分霊として見做されていた時代だからである。<sup>注37</sup>

孝標女は祐子の参内に供奉した長久三年（一〇四二）四月、縁者の「博士の命婦」（五位以上の女史）の案内で、神鏡を拝むことができたようだ。<sup>注38</sup>

しかし、日記にその老女官の「神さび」なことだけを記すのは、神鏡への落胆だったかもしれない。そうした欠落、喪失の感懐は、藤壺の主だった祐子の母である嬪子中宮崩御の実感をともなってもいた。

祐子は、後見人である頼通の高倉邸に常住していた。長久三年十月、宮家の不断経の夜、孝標女は源資通とめぐり会い、親愛の情を抱く。その後、「そこは内裏にこそあらむとすれ。はかせの命婦をこそよくかたらはめ」という夢をみていることからすれば、典侍としての宮仕えを希求し、みずからの夫を資通と定めていたようだ。その夢想が秋の夜の月に心よせた朋輩の女房に、資通を横取りされたような形で挫折してしまうのである。

同じ心に、かやうにいひかはし、世の中のうきもつらきもをかしきも、

かたみにいひかたらふ人、筑前に下りて後、月のいみじうあかきにかやうなりし夜、宮に参りてあひては、つゆまどろまずながめあかいしものを、恋しく思ひつつ寝入りにけり。宮に参りあひて、うつつにありしやうにてありと見て、うちおどろきたれば、夢なりけり。月も山の端近うなりにけり。さめざらましを、いとどながめられて、

夢さめてねざめの床の浮くばかり恋ひきとつげよ西へゆく月

この行文を、夫の任地である筑前に下っていった朋輩の女房に寄せる思いが、いつしか、その同じ地にいる資通への慕情に転化していると読んだのは犬養廉氏（小学館全集頭注、三五四頁）で、さらに「作者が三年越しの逢瀬を綴った源資通が、このころ（永承五（一〇五〇）年九月）大宰大貳として筑紫に下っていることに注目したい」とする。犬養氏はただ筑前に下った親友と憧れた資通が大宰大貳として、ともに西国に居る状況を言ったまでである。事実は親友の朋輩が資通を横取りしたり、結婚した訳では

毛頭ない。だいいち孝標女の夫は橘俊通であって、資通との出逢いの頃は、偶然夫は下野守として赴任していて留守であつたにすぎない。であるから、こういう夢想を綴った深層に、孝標女が天皇の乳母となり、内侍所に関わる女官としての最高職である典侍に任ぜられ、そしてまた夫が大宰大貳であるという名誉と富貴をいっきに実現できる人生の理想の軌跡を幻視し、はかなくも挫折した心境が語られていると筆者はみるのである。

「わが身よりもたかうもてなしかしづきてみむとこそ思ひつれ。われも人も宿世のつたなかりければ、ありありてかくはるかなる国になりにたり」とは、父孝標が常陸介に任ぜられた時の慨嘆であり、その娘は〈大貳三位〉への夢が潰えるつたない宿世であつたということなのであろうか。まさに福家俊幸氏が言うように、孝標女の夢を理想的に実現していたのが、紫式

部の娘大貳三位賢子なのだといえよう。<sup>注(39)</sup>

一方、資通として立身出世と富裕な生活を希求したはずで、祖父時中、父済政と管絃に秀でた家系でありながら、世渡りのために摂関家に密着せざるを得なかったようだ。兼家、道長を経て、資通の時代は頼通に追従した。父済政の場合は道長室倫子の甥であるところから、不用意な言動に責めを負つても道長に救済されたように、資通も頼通の高倉邸への日参の結果として恩恵を受容したようである。<sup>注(40)</sup> また父済政は源頼光の娘を妻として、資通は母とするが、資通もまた頼光女を妻としたらしい（尊卑分脈）。

源頼光は軍事貴族、武門源氏として知られ、摂津、伊予、美濃等の国守を歴任し、財力を蓄え、摂関家への露骨な経済的奉仕ばかりではなく、三条天皇の在位中には、内廷経済を管理する内蔵頭に抜擢されている。<sup>注(41)</sup> そして長和五年（一〇一六）、三条が上皇となると、院司にも指名されていた（小右記、正月二十九日条）。

このような三条天皇との緊密な関係は、頼光が娘の婿とした道綱との関係に抛ると考えるのが至当なのだが、道綱のために頼光が一条の旧藤原倫寧邸を購入し住ませたように、資通の父済政も邸宅を贈与された可能性が高く、頼光の財力に相当頼るところがあつたと思われる。資通が頼光女と結婚するのは頼光没後のようだから、その贈与に与ることがあつたかもしれない。受領との婚姻関係によって、場合によっては家の収入にその私富を組み入れる例も『春記』にみえるから、<sup>注(42)</sup> 弁官コースを歩む資通にとって父済政からの経済的助力の実質はそうなのところであつたのであろう。資通の官位昇進に関しても、長元七年（一〇三四）正月五日に行幸上東門院賞により従四位上に叙されるが、この昇叙は父済政からの譲りであり、また長久五年（一〇四四、十一月二十四日寛徳に改元）正月七日には正四位

上に昇叙されるのも父済政の仁寿殿修造の成功<sup>（じようとう）</sup>によるところであった（公卿補任）。孝標女に逢いにきながら人目を憚って去っていったのが長久五年春のことだから、資通の官職は藏人頭で右大弁、つまり頭の弁の要職にあった。同年正月三十日には近江権守を兼ねたのである。

頼通の時代は、公卿にも赴任しない権守を数多く任命し、家の収益に利用する方法を採るが、例<sup>（注43）</sup>えば長久五年（一〇四四）は従二位参議藤原俊家が伊予権守で、従三位参議藤原経任が播磨権守であった。また正四位下藤原資房が備後権守であり、正四位下源経長は周防権守と美作権守とを兼ねていた。そして資通と同じく藏人頭であった正四位下藤原行経が備中権守という具合である。近江、播磨は大国で、<sup>（注44）</sup>古くから京官に守を兼任させた例が知られ、近江は済政も国守を務めたことがあり、資通は永承四年（一〇四九）二月五日、近江権守から播磨権守に転じた。時に従三位の参議であった。翌永承五年（一〇五〇）九月十七日、大宰大貳を兼ね、同年十一月十一日、赴任賞により正三位となったのである。

なおさらに、資通の歌壇活動の一端も頼光一統との関わりをもっている。頼光の孫頼実<sup>（注45）</sup>は、和歌六人党の中核歌人であり、『狭衣物語』や『玉藻に遊ぶ権大納言』（天喜三年（一〇五五）五月三日六条斎院祓子内親王家物語歌合提出作品）の作者である宣旨の同母弟であった。六人党の一員で叔父である頼家よりも従兄弟の資通が頼実に作詠の場として自邸や山荘を提供し、頼実をその志向する和歌の世界へ誘ったとは高重久美氏が説くところだが、<sup>（注45）</sup>そもそもその山荘等の購入に頼実の祖父頼光ないし父頼国が関わったかもしれない。もちろんこれもこれも頼光一統の援助支援によっているとは限らないが、頼実の家集にみえる長暦・長久年間の歌会の場となった資通の梅津や八条の別邸は、父済政からの贈与相続とまずは考えられよう。

父済政は近江ばかりではなく、丹波、信濃、播磨、讃岐等の国守を長保（一〇〇一）から長暦（一〇三九）にかけて歴任し、道長の家司受領と化し経済的奉仕に徹していくようだ。彰子の第一皇子敦成親王誕生によって当家の別当の一人に任命される辺りに、道長の正妻倫子の甥という立場で道長との交渉の起点が考えられよう。それは寛弘五年（一〇〇八）十月十七日（御堂関白記）のことで、済政はまだ右近衛権少将であった。この時に頼光の長男文章生頼国が親王家の藏人となっている。

また済政は公任息定頼を娘婿とし、中宮権亮であり藏人頭であった定頼は寛仁元年（一〇一七）八月二日、済政宅からの中宮還御之次所賞で正四位下に昇叙している。定頼は婿として済政宅におそらく寛弘七年（一〇一〇）以来住んでいたと思われるが、一時中宮妍子に仕えていた相模（頼光養女）との恋愛沙汰（後拾遺集、六四〇・七五三番歌）で、別居することがあったらしい。

ともかく資通の交流圏は頼光女との婚姻関係で拡がりをもて、文人貴族と言えども受領層の富裕な経済的支援のもとに相互依存的に協調関係を成り立たせていたとみられよう。資通は大宰の地で天喜元年（一〇五三）冬十月歌合を主催して、<sup>（注46）</sup>早世した頼実の影響下にある歌を詠んだとは、高重氏の指摘するところでもある。弁官コースを歩み、播磨権守を歴したのは有国と同じだが、大宰の地での歌合の開催などは、文人貴族としての矜持と気概を示しているといえよう。

資通の後任の大貳が、紫式部の娘賢子の夫となった高階成章であった。もちろん『更級日記』が書かれたのは、その後のことだと言わねばなるまい。



藤原惟憲 治安三年（一〇二三） 従三位非参議 大式

←

源 道方 長元二年（一〇二九） 従二位権中納言 権帥

←

藤原実成 長元六年（一〇三三） 正二位中納言 権帥

←

藤原隆家 長暦三年（一〇三九） 正二位前中納言 権帥

←

藤原重尹 長久三年（一〇四二） 正三位前権中納言 権帥

←

藤原経通 寛徳三年（一〇四七） 正二位権中納言 権帥

←

源 資通 永承五年（一〇五〇） 従三位参議 大式

←

高階成章 天喜二年（一〇五四） 従三位非参議 大式

## 注

- (1) 田中篤子「大宰帥・大宰大式補任表」（東京女子大学「史論」26・27、昭和48年9月）
- (2) 物語本文はあくまでも「帥」だが、当時の慣例上中納言は権帥となるのである。いまは権帥とする。但し、後述するが当該物語が本文通りの「帥」であることもあり得る点を言い添えておきたい。
- (3) 吉海直人『平安朝の乳母達』（世界思想社、平成7年）一六四頁。
- (4) 『古今聞聞集』（巻三）に権帥大江匡房が「道理にてとりたる物」と「非道理にてとりたる物」を分け、各舟一艘に積み上京したという。盗賊の難を避け、私腹の有様を示す訳である。

理にてとりたる物」を分け、各舟一艘に積み上京したという。盗賊の難を避け、私腹の有様を示す訳である。

(5) 他に表現上の類似は、中納言の詠「行くさきをはるかに契る心あるにかけな離れそ箱崎の松」（巻二）と、明石入道の「行くさきをはるかに祈る別れ路にたえぬは老いの涙なりけり」の初二句との関連が小学館新編全集『浜松』の頭注（二五二頁）に指摘される。

(6) 横井孝『円環としての源氏物語』（新典社、平成11年）「明石の入道の基底」

(7) 寛弘五年（一〇〇八）秋当時の播磨守としては、藤原行成が正守で、藤原有国は権守であったが、萩谷朴『紫式部日記全注釈上巻』（角川書店、昭和46年）の考証によって有国とする。

(8) 斎木泰孝「落窪物語に登場する帥の中納言のモデル―藤原有国と平惟仲―」（『王朝細流抄』6、平成15年3月）

(9) 拙稿「フィクションとしての飛鳥井君物語」（『狭衣物語の新研究―頼通の時代を考える』新典社、平成15年）

(10) 新田孝子『栄花物語の乳母の系譜』（風間書房、平成15年）七三八・九頁。

(11) 井上宗雄『平安後期歌人伝の研究』（笠間書院、昭和53年）六一頁。

(12) 山本信吉『摂関政治史論考』（吉川弘文館、平成15年）「摂政藤原兼家と弁官」

(13) 従三位勘解由長官有国の除名の理由を『日本紀略』（正暦二年〔八九一〕二月二日条）は大膳属秦有時を殺害したかどによるとする。

(14) 有国が元の非参議に復したのは正暦三年（九九二）八月二十二日（公卿補任）である。但し有国は従三位で、大宰大式の相当位は従四位下であり、前掲田中論考に大式は初期から全期を通して従四位・正四位が圧倒的に多いとある。有国だけではなく本稿で対象とする平安中・後期の大式は例外ということになるであろうか。

(15) この間の経緯に関しては倉本一宏『摂関政治と王朝貴族』（吉川弘文館、平成12年）「藤原伊周の栄光と没落」に詳しい。但し「この事件に道長や公卿がほ

とんと関与していない点は、特徴的である」(一九九頁)とする。

- (16) 川田康幸『『栄花物語』における有国像の定着』(『中古文学』22、昭和53年9月)
- (17) 道長の有徳性を指摘する他の論考に、山田邦明『『栄花物語』の有国記事について』(山中裕編『『栄花物語』研究第1集』国書刊行会、昭和60年)がある。
- (18) 川田氏が挙げた有国の長保元年(九九九)六月二十四日付の大宰府から送った参議の申文(朝野群載)は、参議となって政事に尽し、天子の恩に報いるために早期帰参を訴えるものであって、伊周を厚遇した点に触れていないからといって、それを否定する根拠はないだろう。
- (19) 今井源衛『勘解由相公藤原有国伝——一家司馬文人の生涯——』(九州大学『文学研究』71、昭和49年3月)
- (20) 川田康幸『『栄花物語』における惟仲像』(『信州豊南女子短期大学紀要』5、昭和63年3月)
- (21) 道兼が薨じたのが長徳元年五月八日だから、惟仲が関係をもったとしても一周忌後、長徳二年五月以降だろう。惟仲、繁子ともに五十歳代である。
- (22) 『小右記』長保元年七月二日条に「中宮大夫惟仲依病上辞中宮大夫之表云々」等により、辞任の理由を病氣とする説もある。高橋由記『平惟仲について——定子の中宮大夫辞任に関連して——』(『国文目白』35、平成8年2月)
- (23) 黒板伸夫『撰関時代史論集』(吉川弘文館、昭和55年)「大宰帥小考——平惟仲の補任をめぐる——」(A)及び「大宰帥についての覚書」(B)。次の引用は後者(B)論考からである。
- (24) 山中裕『平安人物志』(東京大学出版会、昭和49年)「敦康親王」に詳しい。
- (25) 伊周に関しては『日本紀略』寛弘五年(一〇〇八)五月十六日条に「今日、前大宰権帥伊周准大臣給封千戸」とあるが、寛弘二年頃より昇殿等、徐々に復帰の施策がとられていた。隆家は『権記』によると長保四年(一〇〇二)九月二十四日に復した。
- (26) 倉本一宏『一条天皇最期の日々』(駒沢女子大学『日本文化研究』4、平成14年

3月)に詳しい。

- (27) 黒板伸夫前掲書「刀伊の入寇」と藤原行成
- (28) 引用本文中「帥中納言」とあるのは、権中納言を中納言と記す如く物語上の呼称表記で、正しくは権帥であるのを帥と記したまでのことである。
- (29) 『小右記』治安三年(一〇二三)十一月二日条に「春日祭使少将良頼妻故帥女也」等により知られ、二人の間に良基が誕生している。久保木秀夫『枕草子における源経房』(日本大学『語文』98、平成9年6月)は、「良基の生年(治安三)から推して婚儀は治安元・二年、あるいはもう少し余裕を見て寛仁年間(一〇一八—一〇二二)とすべきであろうか」とする。
- (30) 中納言だから自ら望んだのであろう。『栄花』(巻十六、ものしづく)には「いみじうくやしう思ひ乱れたまへ」と、望んだことを後悔している様子がみえるが。
- (31) 杉崎重遠『王朝歌人伝の研究』(新典社、昭和61年)「後一条天皇の御乳母大式三位」
- (32) 萩谷朴『紫式部日記全注釈上巻』(前掲)は『左経記』長元九年(一〇三六)五月十七日条に後一条天皇の崩御に関して素服を賜った「先の藤三位」は、修理亮藤原親明女で源高雅妻藤三位修理典侍基子として、繁子を退ける。
- (33) 萩谷朴『紫式部とその娘賢子』(『むらさき』11、昭和48年6月)
- (34) 角田文衛『日本の後宮』(学燈社、昭和48年)及び吉海直人『平安朝の乳母達』(前掲)が天皇の乳母が典侍となり三位を叙位される傾向を指摘している。
- (35) 和田律子『『更級日記』における宮仕えの記をめぐる』(立教大学『日本文学』74、平成7年7月。のち『研究講座 王朝女流日記の視界』新典社、平成11年)が、三作品の関係を薫、頼通、資通を通して論じている。
- (36) 加納重文『典侍考』(『風俗』59、昭和54年8月)は、天皇が成人した後の乳母の職務に「今度は天皇補任の最高級女官としての現実の職務を持つ典侍を与え、さらに優遇の手がかりにした」と述べ、「典侍における乳母の資格が、平

安中期の官女としての典侍を考えるうえでの、基本的な前提となる」とする。またその視点に立って倉田実「源典侍物語の意味―「典侍」の職掌から―」（『源氏物語の鑑賞と基礎知識 紅葉賀・花宴』至文堂、平成14年4月）は、源典侍が桐壺帝の乳母であった可能性をいう。

(37) 斎藤英喜『アマテラスの深みへ』（新曜社、平成8年）「平安内裏のアマテラス―内侍所神鏡をめぐる伝承と言説」

(38) 迫徹朗『「更級日記」の「博士の命婦」は誰か』（『中古文学』42、昭和63年11月）は、「博士の命婦」を安部長子とする。なお孝標女が拝んだ神鏡は、長久元年九月に火災のため粉々に砕けた破片二粒（春記、長久元年九月十日条）が入った唐櫃なのだろう。この「博士の命婦」が破片の搜索に加わり、それを見つけた唐櫃に収めたいらしい。また当時内侍所の実質的な管理が内侍・掌侍以下の、こうした命婦が担当していたとしても孝標女の典侍幻想を妨げるものではない。

(39) 福家俊幸『「更級日記」と物語創作―記されない意味―』（和田律子編『更級日記の「新研究」―孝標女の世界を考える―』新典社、平成16年）。

（和田律子編『更級日記の「新研究」―孝標女の世界を考える―』新典社、平成16年）。

なお福家論は伊藤幸幸『「更級日記研究」』（新典社、平成7年）の「紫式部の娘、大式の三位は、正に孝標女が夢みていたところの「人の御乳母して内裏わたりにあり、みかど後の御かげにかくるべきさま」を体現する存在だったのである」という指摘を受けている。上記『新研究』に載る拙論「孝標女の物語―『夜の寝覚』の世界」は、女院としていまだ権勢を誇る彰子に紫式部に代わる物語作者としての評価を得るため『巢守』『寝覚』等が発信されていたことを述べたものである。

(40) 小谷野純『「平安後期女流日記の研究」』（教育出版センター、昭和58年）「更級日記源資通との邂逅譚」では、『春記』長暦三年（一〇三九）十月八日条の服暇の定めを無視した例を挙げる。

(41) 元木泰雄『源満仲・頼光』（ミネルヴァ書房、平成16年）は、受領で内蔵頭に任ぜられたのは藤原陳政に次ぐ二人目とし、「受領の内蔵頭拔擢が、単に富裕

さによるものではなく、天皇・摂関との密接な関係を前提としていたことを物語る」と述べる。以下の済政・資通父子の記述は同書に拠るところが多い。但し内蔵寮に関しては森田梯『平安時代政治史研究』（吉川弘文館、昭和53年）「平安中期の内蔵寮」が詳しい。

(42) 『春記』の記主藤原資房は、参河守源経相の娘を妻としていて、長暦三年（一〇三九）十月七日程には「衣食等雑事、巨細皆在彼人養顧」と記している。当時資房は藏人頭兼左近中将で、近江介でもあった（藏人補任）。寺内浩『受領制の研究』（塙書房、平成16年）に指摘されている。

(43) 遥任の権守の収入は正官の手を経て貢上される場合が多かったと村山修一「源氏物語と受領」（『解釈と鑑賞』昭和34年4月）は推測している。権官の太政官が摂関家につながる者としてのステイタスがあった時代状況と権守頻出は重なるようである。なお権中納言に関しては神尾暢子『王朝国語の表現映像』（新典社、昭和57年）「官職呼称の人物映像―堤中納言の権中納言」が詳しい。

(44) 大国の実質は問わねばなるまいが、近江・播磨・伊予の三か国について、その受領が道長・頼通政権下では天皇・摂関家の関係者によってほぼ占められていることを寺内浩前掲書は一覧表にしている（二五八頁）。伊予権守は長和四年まで頼通の側近となる源隆国がその任にいた。

(45) 高重久美『和歌六人党とその時代―後朱雀朝歌会を軸として―』（和泉書院、平成17年）「宇多源氏資通―摂津源氏歌人頼実像が照射するもの―」。以下高重説は同論に拠る。

(46) 萩谷朴『平安朝歌合大成四』（同朋舎）に於いて「一五八」「永承五年九月―天喜二年十一月」冬 太宰大貳資通歌合」と示される歌合。なお『後拾遺集』（巻三、夏）に載る「筑紫の大山寺といふ所にて歌合し侍りけるによめる」とする詞書を記す元慶法師の一七八番歌は『難後拾遺』では、この時の詠か。